

# 未来からの生中継

## —ヴォストーク計画のテレビ・プロパガンダー—

亀田 真澄

はじめに—「未来の歴史」をたどって

人類はこれまで、未来をどんなふうに思い描いてきただろうか？ たとえば、20世紀初頭に典型的だったイメージには、翼のついた空飛ぶ車、チューブから栄養摂取する食事スタイル、全てが空中を浮遊する無重力生活、話し相手が投影されるテレビ電話などがあった。奇想天外なものもあれば、現在すでに日常の一部になっているものもある。そんなふうに人類が思い描いてきた「未来」の、重要なターニングポイントとして、ここではまず1930年代を、そして次に1960年代前半を挙げたい。

1930年代は、特に第一次大戦後に生まれた大量生産・大量消費の社会、ラジオ・映画・グラフ誌といったメディアの大衆化を背景に、経済的繁栄を「幸せ」と定義する国家規模のキャンペーンが、アメリカから世界へと広まっていった時代である。1929年10月に始まる大恐慌という現実から目をそらさせるかのように、夢のような明日を送る未来の自分をイメージさせるライフスタイル宣伝が、1930年代を席卷することとなった。この「幸せな未来」のキャンペーンを動かしていたと考えられるのは、パブリック・リレーションズ（PR）という用語を作ったことでも知られている、エドワード・バーネイズである。彼は宣伝活動に精神分析理論を持ち込んだ最初の人物としても有名であるが、それはバーネイズがジークムント・フロイトの甥であったという来歴とも密接に関係していた。

1931年には「アメリカン・ドリーム」という用語が生まれ、「進歩の世紀」がスローガンに掲げられたシカゴ万博（1933年～34年）では、空中レストランやスカイライドと呼ばれた懸垂型モノレールが未来らしさを演出していた。ハリウッドは「アメリカン・ドリームもの」の映画を大量に生み出したが、なかでもディズニー映画「ピノキオ」（1940年）の主題歌「星に願いを」は、アメリカン・ドリームのコンセプトをより若い世代にも広めることとなる。

さらに1939年から40年にかけて開催されたニューヨーク万博は、「明日の世界」をテーマに、どれも素晴らしく進んで見える、数多くの未来予想図を展示した。万博のシンボルとなった巨大な球体ペリスフィアの内部には、「民主都市 Democracy」と呼ばれる未来都市のミニチュアが設置されていた。これは球体内部の壁に沿う丸い廊下が回転することで、6分間で未来都市を360度見渡すことができるという仕組みになっていた。民主主義と資本主義を結びつけながら未来をイメージさせる「未来都市」のコンセプトを考え出したのは、ニューヨーク万博全体の広報を担当していた、バーネイズである。また、ゼネラル・モーターズ社のパヴィ

リオンでも、20年後のニューヨークの縮尺模型を展示した「フューチャラマ Futurama」が人々を未来へといざなっていた<sup>1</sup>。

1930年代のアメリカで発展した「幸せな未来」キャンペーンが、世界に及ぼした影響力は甚大であった。イデオロギー的には真っ向から対立する存在であったソ連も、その例外ではない。食料配給制が廃止され、ソ連製シャンパンなどの嗜好品が奨励されるようになった1935年、スターリンは「生活はより楽しくなった」というスローガンを声高に宣言した。このスローガンが示していたのは、自己犠牲的な労働によって社会主義国家を建設する時代の終わり、すなわち、消費を楽しむ時代の到来であった<sup>2</sup>。1930年代、ソ連の映画行政最高責任者であったボリス・シュミツキーは、ハリウッド見学ののちに、ソ連版のハリウッドを作り出すべく映画村の建設を実行した。またソ連のミュージカル映画を代表する監督グレゴリー・アレクサンドロフも、アメリカ滞在時の経験を生かしてソ連製ミュージカルを製作していたし、これは集団農場（コルホーズ）での豊かで幸せな生活を描く「コルホーズ・ミュージカル」という独特のジャンルを生んだ。このようにして、ソ連でも映画を通した「幸せなライフスタイル」宣伝が行われるようになっていく。

また1934年以降、ソ連のあらゆるジャンルの芸術が「社会主義リアリズム」の形式に従うことが求められ、この形式はのちに共産圏全体の公的文化を支配することになっていった。この「社会主義リアリズム」は、未来を楽天的に描くという点で特徴的なスタイルであり、アメリカの「幸せな未来」キャンペーンの共産主義的変種と見なすことができるのではないかと。いずれにしても、ここで忘れてはならないのは、アメリカにおける「幸せな未来」キャンペーンが、大恐慌という濃い影を照らすまぶしい光であったのと同じように、ソ連においても、物質的な豊かさや消費の楽しみを強調するキャンペーンは、現実には厳しい物資不足の時代に行われていたということ、さらに、スターリンによる大粛清という暗い時代の産物であったということである。

「幸せな未来」のキャンペーンは、第二次大戦とそれに伴う混乱の時期には下火になり、そののちの、東西冷戦が激化する1960年代前半、核戦争の脅威が増していくのと並行して再燃することとなる。その契機を作ったのは、1961年のガガーリンによる地球周回飛行である。これまでSFのなかの出来事であった宇宙飛行が実現したということは、人々の未来イメージを根底から覆した。そしてガガーリン以降の「幸せな未来」は、宇宙というまったく新しいフロンティアをも越える科学技術によって実現されるものと考えられるようになっていく。

本稿では、アメリカとソ連による有人宇宙飛行計画を国家宣伝の一部として捉え、特にソ連のヴォストーク計画が実施していたテレビ・プロパガンダに着目することによって、ヴォストーク計画が一種の未来展示として果たした役割について検討する。

## 1. プロパガンダとしての宇宙飛行

「未来らしい」近未来社会に欠かせないのが、交通手段が空を飛んでいるというイメージで

ある。1930年のアメリカ映画「想像してごらん Just Imagine」は、50年後のニューヨークを舞台としているが、ここで自動車はすべて空中を通行しており、それを交通整理するのは浮遊する信号機である。空飛ぶ車というモチーフは、ソ連映画「輝ける道 Светлый путь」(グレゴリー・アレクサンドロフ監督、1941年)でも、主人公が未来のモスクワへ移動するシーンに登場する。フィクションの世界のみでなく、1930年代にはアメリカでもソ連でも、子供たちの憧れといえば、空中の世界を支配する、飛行士やパラシューターたちであった。チャールズ・リンドバーグが大西洋単独無着陸飛行に成功し、国民的スターになったのは1927年であったが、ソ連でも1934年に設立された国家最高の英雄称号「ソ連邦英雄」を最初に授けられたのは、飛行士たちであった。このころのソ連では、特に女性の飛行士やパラシューターをモチーフにした作品が多かった。ソ連では飛行士を目指す少女の成長を描いた映画「飛行士たち」(ライズマン監督、1935年)が人気を集めていたし、国内外へ向けたプロパガンダ・グラフ誌『ソ連邦建設』の1935年12号<sup>3</sup>でもパラシューター女性の訓練が飛び出す仕掛けやフォトエッセイでつづられていたほか、ユーリー・オレーシャもこのころ短篇「ナターシャ」(1936年)で、パラシュートに夢中になる女性を主人公にしている<sup>4</sup>。

同じころ、SF映画「宇宙飛行 Космический рейс」(ヴァシリー・ジュラヴリョフ監督、1936年)がロケットで月へ行き、月面探査をする様子を描いているが、この映画が画期的であったのは、ロシア宇宙開発の父とされるコンスタンチン・ツィオルコフスキーによる科学的な考証を経ていたという点だ。これまでは完全にファンタジーの領域にあった宇宙飛行というモチーフが、このころからは実現可能な未来とみなされるようになっていく。実際、第二次大戦中にナチス・ドイツが行ったミサイル兵器開発を引き継ぐかたちで、戦後のアメリカとソ連はミサイルおよびロケットの開発を進めていくことになり、さらに1957年10月にソ連がスプートニク1号を打ち上げたことで、いよいよ人間が宇宙へ飛び立つ日も近いと、期待が高まっていた。

アメリカとソ連による宇宙開発競争は、原爆・水爆実験やキューバ危機と並行するかたちで行われていたもので、ロケット開発を装った軍事ミサイルの開発、偵察のための衛星の打ち上げなど、軍事力強化を第一の目的とするものであったことには疑いはない。ただし、有人宇宙飛行に限定すれば、人間を宇宙空間に飛ばして滞在させるということ自体は、学術的価値という点でも、また軍事的な観点からも、大きな効果があるとは考えられない。偵察は人工衛星に任せればいいし、ロケットの連続打ち上げ能力を示すという面はあるものの、有人である必要性はない。宇宙飛行士を乗せて無事に帰還させるということの要求する、技術や設備にかかるすさまじい財政支出を補って余りある効果とは、国家のインパクトを強めるためのプロパガンダにほかならない。

1961年4月、ユーリー・ガガーリンが人類初の宇宙飛行を実現すると、宇宙へと人類を送り込むことのできる国こそが世界の勝者であるという認識が急速に広まっていった。鈴木一人が「ガガーリン・ショックは、アメリカの宇宙開発を『米ソ宇宙競争』へと駆り立て、アメリカのみならず、世界の宇宙開発の『ゲームのルール』を変え、現在に至るまで続く『宇宙開発

『宇宙飛行士をより遠くに送る』という図式を作った<sup>5</sup>』と指摘しているように、ガガーリンの宇宙飛行のち、人間を少しでも長く宇宙空間に滞在させるということが、国家の優位性の証明になった。このころから、「宇宙飛行は人類の夢である」、また「宇宙飛行は人類の新しい希望である」という「大きな物語」がさかんに語られるようになり、アメリカとソ連はこの物語のもっともふさわしい語り手となるための、椅子取りゲームを始めることとなった。

ガガーリンに始まるソ連のヴォストーク計画（1961年～63年）とライヴァル関係にあったのは、アメリカのマーキュリー計画（1959年～1963年、ただし最初の打ち上げは1961年）である。この二つの有人宇宙飛行計画は、テレビイメージの性質という点において対照的だ。

アメリカでは1958年にアメリカ航空宇宙局（NASA）が設立されたのち、効果的な情報公開が重視されるようになり、特にロケット打ち上げの様子を間近で撮影することにはかなりの労力が注がれていた。マーキュリー計画においても、国内のテレビ局との協力関係のもと、カウントダウンからロケット打ち上げに至る瞬間、及び宇宙飛行士が地上に帰還する着水のシーンが国内で生中継されていた。有人宇宙飛行においてもっとも危険性の高い打ち上げと着水を包み隠さずに放映することによって、クリーンな国家像を宣伝することも、アメリカ政府の狙いであった<sup>6</sup>。

ソ連のほうは他方、打ち上げを事前に公表するという自体、1960年代前半にはありえなかった。打ち上げが成功したのちに初めて、ロケットの打ち上げ自体を公表するという秘密主義を徹底していたのである。それでも、あるいはそれゆえに、ソ連のヴォストーク計画は、アメリカを上回るマス・エンターテインメントで人々を魅了するのに成功した。それはソ連のテレビ・プロパガンダが、安全な瞬間だけを魅力的に見せたという点にある。特に、ソ連では1962年8月に打ち上げられたヴォストーク3・4号アヴェック飛行以降、宇宙船からの生中継が国内外へ向けて実施されていたが、この人類初の宇宙からの中継放送は大きなショックをもって迎えられ、「ソヴィエト・コスモヴィジョン Советское космовидение」と呼ばれるようになった。アメリカが宇宙船内からの生中継を実施したのが1968年10月のアポロ7号でのことであるのに鑑みると、実に6年2か月も先んじていたこととなる<sup>7</sup>。この「ソヴィエト・コスモヴィジョン」とは、どのようなものだったのだろうか。

## 2. ヴォストーク・ミッションとテレビ

ソ連が初めて宇宙船にテレビカメラを搭載したのは、1959年10月に打ち上げられた月探査機ルナ3号であった。ルナ3号が搭載していたのは、月を巡回しながら月面をエニセイ・システムのフォトカメラで撮影し、テレビというよりはファックスのような要領でその画像データを宇宙空間から地上へ送信するという装置である<sup>8</sup>。この装置は月の裏側からの撮影とそのデータ送信に成功し、こうして人類は、地球とは反対側の月面の様子を初めて知ることとなった。次にテレビカメラが搭載されたのは、犬二匹などを搭載したスプートニク5号（1961年3月）である。これ以降は、一秒間のフレーム数を極力抑えたスロースキャン方式のセルゲ

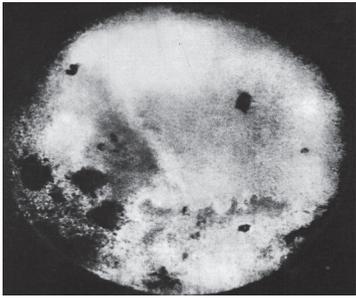


図1 ルナ3号から撮影した、月の裏側の写真。グラフ誌「ソヴィエト連邦」、1959年11号。



図2 管制室でヴォストーク1号内部のガガーリンを確認する様子。映画「ソヴィエト・コスモヴィジョン」より。

ル・システムが使用されることとなる。スプートニク5号が打ち上げられている間、ミッション・コントロールのテレビ画面では、宇宙船内の犬2匹の様子が常時映されていた。さらに、ガガーリンを乗せたヴォストーク1号（1961年4月）、ゲルマン・チトフを乗せたヴォストーク2号（1961年8月）にもテレビカメラは搭載されていた。ただしリアルタイムで映像を観ることができたのはミッション・コントロールのスタッフのみであり、のちに編集したものが一般のテレビ向けに放映された。

ソ連宇宙開発における最初のテレビイベントは、ガガーリンが地上に帰還して2日後に行われた、モスクワ・赤の広場での帰還記念パレードであった<sup>9</sup>。モスクワの飛行場に着いたガガーリンが、オープンカーに乗って赤の広場までをパレードし、最後にはフルシチョフと一緒にレーニン廟の上から演説を行うという国家イベントである。ソ連のすべてのテレビ局が参加したのみでなく、西側諸国の放送ネットワークである欧州放送連合（EBU）と、東側諸国の放送ネットワークである国際放送機構（OIRT）の協力体制のもと、ヘルシンキ、ベルリン、ロンドン、パリ、ローマなど、西側の各都市でもモスクワからの生中継が放映された。このようにしてガガーリンのモスクワ・パレードは、東西陣営の境界を超えて全欧州に生中継された初めてのテレビイベントになった。このときソ連は、宇宙開発の成果をヨーロッパ全域へと生中継することによって、地球という境界を超える能力と、東西陣営という境界を超える能力とを同時にアピールしたと言えるだろう。1960年代を通してグローバル・コミュニケーションの確立は冷戦の行方に強く影響する事柄であり、国際的なテレビ中継ネットワークの確立はそれ自体が技術力の誇示でもある。ガガーリンのパレードは、宇宙開発とグローバル・ネットワークという二つの達成を同時に、しかも人々の注意を惹きつけるかたちで世界に印象付けるものであった。



図3 ガガーリンのモスクワ・パレード中継の様子。グラフ誌「ソヴィエト連邦」、1961年5号。

さらにソ連とヨーロッパのテレビ視聴者たちは、1962年の夏、宇宙にいる人間の様子をリアルタイムで見るといった夢のような体験をした。8月11日・12日に打ち上げられた、アンドリアン・ニコラエフとパヴェル・ポポヴィッチを載せたヴォストーク3・4号のアヴェック飛行では、「宇宙からの実況 Репортаж из космоса」と題する宇宙船からの生中継が、ソ連とヨーロッパに向



図4 ヴォストーク3号・4号からのテレビ中継。グラフ誌「ソヴィエト連邦」、1962年9号。

けて行われた。「宇宙からの実況」は1回5分ほどで、ニコラエフとポポヴィッチの宇宙船内を交互に見せていた。彼らは宇宙船内のテレビカメラに向かって航海日誌をあやつるなど、メディアフレンドリーな振る舞いを見せて見せた。この実況放送は3日間で計15回に及んだ<sup>10</sup>。

この直後から、ソ連のテレビ中継による宇宙の可視化を指して、「ソヴィエト・コスモヴィジョン」という用語がさかんに使われるようになる。特に、ロシアの宇宙開発を宇宙テレビに着目しつつ迎ったドキュメンタリー番組「ソヴィエト・コスモヴィジョン」（レオニード・ゾロタレフスキー監督、1962年～1963年）が大きな反響を得たことで、ソ連の宇宙開発はテレビと密接に結びついていった。この番組が1964年のモンテカルロ・テレビ祭でゴールデンニフ賞を受賞すると、ソ連が宇宙テレビによって世界をリードしているという感覚がさらに強まっていく。



図5 ヴォストーク5号に搭乗したワレンチナ・テレシコワ。グラフ誌「ソヴィエト連邦」、1963年7号。

宇宙船からの生中継は、1963年6月14日と16日に打ち上げられた、ヴォストーク5・6号アヴェック飛行でも実施された。2人の宇宙飛行士が互いに連絡を取り合う場面や、フルシチョフからお祝いの言葉を伝えられる瞬間が中継されたほか、特にヴォストーク5号のヴァレリー・ビコフスキーは無重力を生かした手品をして、人々を喜ばせた。このミッションがプロパガンダとして優れていたのは、ヴォストーク6号に世界初の女性宇宙飛行士ワレンチナ・テレシコワを乗せたという点である。このミッションでソ連は、地球と宇宙という境界、東西陣営という境界を超えたのみでなく、ジェンダーという第3の境界も取り払うこ



図6 ヴォストーク6号からのテレビ中継。グラフ誌「ソヴィエト連邦」、1963年7号。

とによって、男女平等という社会主義の理想を高らかに示した。さらにテレシコワは11月、ヴォストーク3号に登場したニコラエフと結婚したが、これは「宇宙結婚」として大々的に宣伝され、フルシチョフやその他の政府高官が列席した結婚式も、やはりテレビ中継された。

ヴォストーク計画の有人宇宙飛行は、徹底した秘密主義によって管理された「コ

スモヴィジョン」の性質、そして生中継という放映形態自体の有するメッセージ性によって、ソ連がアメリカよりも優れた国家であることを強調するマス・エンターテインメントになりえた。それでは、ソ連がアメリカより6年以上も早く宇宙からのテレビ生中継を実現したのは、なぜだったのだろうか。

### 3. ソ連のテレビ・プロパガンダにおける「ライブ性」

アメリカでは、NASA 内部においても宇宙船へのテレビカメラ搭載については意見が分かれていた。宇宙船からのテレビ中継は、税金を支払う国民への説明責任を果たすうえでも重要だとする人々はいたが、重量が増えてしまうという点でも、通信システム全体に不具合をもたらす可能性があるという点でも、テレビカメラはデメリットのほうが大きいとする立場が多数派であった。特に宇宙飛行士たちは、ミッション実行中にテレビ視聴者へのサービスをするときには乗り気ではないことがほとんどであった。

これに対してソ連では、宇宙飛行士たちは従順な軍人であり、ソ連のロケット開発の最高責任者であったセルゲイ・コロリョフを頂点とするトップダウン式の指揮系統によって決定されていたという。また、ソ連は空中偵察写真のフィルム回収技術において、アメリカよりもはるかに遅れていたことも、ソ連が宇宙テレビシステムの開発を急いでいたことの原因のひとつだろう。宇宙とのテレビ通信システムは、フィルム回収技術の代替案であったのみでなく、飛行機からの偵察から衛星による偵察へと時代が動いていたため、宇宙船へのテレビカメラ搭載もその開発の一部と考えられたのではないだろうか。

コロリョフはかなり初期の段階から宇宙船へのテレビカメラ搭載を準備しており、1956年には全ソ連テレビ科学研究所<sup>11</sup>で、宇宙船搭載用テレビカメラの開発を指示している。ただし当時の宇宙テレビ開発者たちの回想録をひもとくと、1956年の段階では、宇宙テレビの実現はまだまだ先のことと考えていたようである<sup>12</sup>。それが劇的に変化したのは、1957年11月3日、スプートニク2号成功のニュースがラジオで流れた直後のことであった。コロリョフが全ソ連テレビ科学研究所にやって来て、宇宙テレビ開発スタッフをその場に招集し、月の裏側を撮影して地球に送るための写真テレビシステムと、宇宙船の生物を観察するためのテレビカメラ・システムの開発を指示したのである。コロリョフはこのとき、「スプートニクも、ラジオあるいはテレビ装置を搭載していなければ、中世のカタパルトから投げ出された石と同じだ<sup>13</sup>」と述べた。その日を境として、宇宙テレビの開発は、急ピッチで進められることとなった<sup>14</sup>。

さらに、ソ連は宇宙船からの映像を放映する際、ソ連国内のみでなくヨーロッパ全域へも同時中継を行っていたことに着目したい。宇宙開発自体は徹底した秘密主義で進められていたにもかかわらず、想定外のことも放映されてしまう危険のある、生中継を選択したのはなぜだったのか。それは、宇宙開発の成果を単に記録するだけでは十分でなく、リアルタイムで宇宙にいる人間の様子を伝えるというところに、プロパガンダとしての力点が置かれていたためだろう。

このことの背景には、1960年代のソ連において、テレビ放映の「生中継」が重視されていたということがあった。テレビ放映は、その初期においてはほとんどすべて生中継であったが、1950年代には全世界的に録画放送の割合が増えていく。再放送や映像編集が可能な録画放送はテレビ製作側にとって簡便であったのみでなく、視聴者にも人気が高かったため、アメリカなどではニュースを除くと生放送の番組は少なくなっていった。しかしソ連は例外的で、1960年代末までほとんどすべての番組が生中継で放映されていた<sup>15</sup>。これには、フィルムやビデオテープなどの物資不足も影響していたと考えられるが、むしろ生中継をテレビ放送の特徴とみなす、ソ連に特有のテレビ文化に起因するところが大きい。

1950年代まではモスクワにおいてもなお、プロパガンダや教育の手段としてはまずラジオが第一であり、テレビは文化的なものや娯楽のための副次的なものと考えられていた。そのため1950年代から1960年代初頭にかけてのソ連では、ラジオ業界がエリートとみなされていたのだが、そんななかでテレビ制作へ向かったのは、テレビが社会に与える可能性を信じる、情熱に満ちた若いスタッフたちであった。彼らはライブ放送にこそ信頼性があるとして、録画放送への強い疑念を持っていた。テレビの本質を、そのリアルタイムでの映像伝達能力に置くというのは、1960年代のソ連テレビ文化に支配的な考え方であったが、これは当時影響力の強かった文化批評家ウラジーミル・サツパクが提唱していたことである。このことはビデオ技術の発展を停滞させ、国際テレビ放送におけるソ連の出遅れを生むことにもなるものの、言論統制の厳しい時代にあって、言い間違いの危険性も十分にあるライブ放送に、彼らがあえてこだわったのはなぜだったのだろうか。

#### 4. 生放送の価値

サツパクは『テレビとの対話』（1962年）において、テレビの特性として「即興性」を挙げている。

まず即興性である。云いかえるならば、あなたのスクリーンで生じていることが、この瞬間それ自体で起きており、テレビ・レンズは、いわばレポーターとして、生き生きとして自由に進展する行為を単に記録する、という感触なのだ。人生を『覗く』。不意打ちに遭った人生。おそらくはテレビが与えるもので、これが最も強烈なものだ。言葉と思想の誕生の場、あるいはフットボールのコンビネーション、あるいはその目があなたの目を見ている役者の顔を流れる涙…そうした場に、あなたは立ち会っている…<sup>16</sup>

これはさかのぼって1920年代、映画がまだ新しいメディアであったころ、映画の本質とはカメラで撮影されていると知らない人の生活を、あるがままに記録する性質だとする議論があったことを思い起こさせる。ソ連初期のドキュメンタリー映画監督ジガ・ヴェルトフは1923

年に、「隠しカメラで撮影された、演出されたのではない人生のショット、人生の一場面そのままのフレーム、無意識に捉えられたもの<sup>17</sup>」こそが映画の「真実」であると述べていた。シナリオに沿って物語が展開する「劇映画」に対して、ヴェルトフなどの「非劇映画」派のグループは、カメラレンズとは肉眼を超えた「映画一眼 Кино-глаз」であると考えていた。ヴェルトフによれば、普段の生活は仮面の下に成り立っているが、カメラレンズはその仮面を剥ぎ、肉眼では捉えられないような現実の姿を映し出すことができる装置なのである。

サツパクは、「不意打ちに遭った人生」をリアルタイムでテレビ視聴者に届けることの効果について、次のように述べている。「テレビでは読むのではなくて、しゃべるのだ、ということ。観客へのアプローチ、観客とのかかわりあい、ここでは室内風で、親密な性格のものであること。テレビ放送は視聴者たちに、いわゆる『臨席の効果』すなわち共に関与する感じを生み出すこと。さらに放送カメラのレンズの前には、自由にして即興的でなくはいけないことである<sup>18</sup>」。サツパクによると、テレビ番組が何よりやっはいけないことは、「やらせ」である。スクリーンを通して他人の生活を覗き見ることこそが、テレビ視聴の楽しみであり、「やらせ」でなくとも、あらかじめ準備されたシナリオ通りに進む番組構成は、テレビの特性を存分に利用したものではないと考えられていた。

サツパクは同書において、女性ニュースキャスターたちこそが時代のアイドルとなったと強調する。サツパクによると、彼女たちはあたかもスクリーンを通して一人ひとりに語りかけているように見えるが、それは生放送で即興的に話しているためである。シナリオ通りの発言ではなく、くだけた口調で即興的に話しかけるキャスターたちは、女優とは違って自分自身のままでスクリーンに映っているように見え、そのことがテレビ・アイドルという、新しい個人崇拜のかたちを生むことになった。

1960年代のソ連におけるアイコン的存在として、忘れてはならないのが宇宙飛行士たちであるが、その個人崇拜のあり方も、これまでの英雄たちよりはニュースキャスターへの憧れのほうに近かった。宇宙飛行士のイメージ戦略を担当していたのは、空軍のニコライ・カマーニン将軍である。カマーニンは1930年代の伝説的な飛行士であり、北極で遭難したチェリユースキン号の乗組員を救助した功績によってソ連邦英雄を授与された人物だ。自身が個人崇拜の対象でもあったカマーニンがつくろうとする宇宙飛行士のメディア・イメージには、1930年代の飛行士のイメージ形成を直接継承する部分も多かった。たとえば、宇宙飛行士たちの自伝を出版する際に、カマーニン自身の自伝をモデルとするようゴーストライターに指示していた。ただし飛行士や労働英雄といった1930年代の英雄たちが、その超人的な能力を讃えられていたことと比べると、宇宙飛行士たちは息子、娘のような存在としてメディアに登場しており、失敗をすることもある「人間らしい」英雄であった点で大きく異なっている。

## 5. テレビ・アイドルとしての宇宙飛行士たち

アンドリュー・ジェンクスは『笑顔をやめられなかった宇宙飛行士』のなかで、ガガーリンの「カリスマ性」を、演出された「息子らしさ」に見ている。人々からは名前ユーリーの愛称形

「ユーラ Юра」、「ユーラチカ Юрочка」等と呼ばれることが多く、家族の一員のように身近な存在として愛されていた<sup>20</sup>。

これまでのソ連の英雄が崇拜されるべき「新しい人間」であったのに対し、宇宙飛行士たちのメディア・イメージは、むしろ普通の青年らしい一面を強調するものであった。たとえばあるパレードの日、ガガーリンはブーツの紐がほどけているのに気づかず歩き出してしまった。周囲では、ガガーリンが公衆の面前で転んでしまわないかとずいぶん心配したそうだが、結局何事もなくパレードは済んだ。ただし、その様子は映像に残っている。そこで映像を編集するスタッフが命じられたことは、そのシーンを削除するのではなく、逆にガガーリンのほどけた靴紐を強調することであったという<sup>21</sup>。

ヴォストーク計画の宇宙飛行士たちは、アメリカのマーキュリー・セヴンたちより平均的に10歳近く若いということもあって、特にフルシチョフとの関係では「父と息子のように」という形容がしばしば用いられていたし、テレビや雑誌でも宇宙飛行士たちの妻や子供よりは母親が取り上げられることのほうが圧倒的に多かった。スターリンは1930年代、飛行士のことを「私の鷹たち」と呼んでいたが、コロリョフがそれを受け継ぎながら、宇宙飛行士たちのことを「小さな鷹たち」と呼んでいたことにも、その違いが垣間見える<sup>22</sup>。

対外的にも、ソヴィエト人というとしかめ面で共産主義を宣伝する言葉しか発さない人々だ、というイメージを覆すために、宇宙飛行士たちはメディアフレンドリーな振る舞いをするのが要求されており、国外においてはイデオロギーに偏った発言は禁じられていた。サッパクはガガーリンの地球帰還を記念したパレードの印象を、以下のように記している。「柔らぐ百万の目一人々は自分の家のスクリーンでユーリー・ガガーリンを見る。ほれ、出て来た。健康で、若くて、やさしい。一昨日、ちょっと宇宙を飛んで、戻って来た。【…中略…】飾り気なく公明さを持つ（かれ）。首尾よく宇宙から、その良好な気分と、はにかみのスマイルをもたらした<sup>23</sup>」。テレビに映し出されるガガーリンの笑顔は、テレビ・アイドルという新しい英雄の登場と、スターリン期の巨像趣味的な個人崇拜の時代の終わりを示していた。

そしてテレビ・アイドルとしての宇宙飛行士たちのイメージは、ヴォストーク3号から実施された宇宙船からのテレビ中継を通して確固たるものとなっていく。前述のように、ヴォストーク計画の宇宙飛行士たちは、宇宙船からの中継の際は無重力を生かして身近なものを浮遊させたり、テレビカメラに向かって話しかけるかのようにふるまったりと、テレビの前の人々を楽しませる工夫をしていた。

特にヴォストーク3号・4号アヴェック飛行のときには、初の宇宙船からの中継であったため、宇宙船のアンテナの向きがずれて信号が受信できなくなることも多かった。しかしちゃんと代替案が考えられていて、テレビ画面が真っ暗になってしまうと、すぐにポポヴィチの歌う「青い惑星」が流れるという、秀逸な演出がなされていた。その歌は以下の歌詞で終わるのである。

別の惑星から僕たちは帰ってくる

そしてまた地球の暁を見るんだ！  
地球！ 地球！ 青い惑星！  
君は一番素敵さ、どんなに美しい星よりも！<sup>24</sup>

この歌はポポヴィッチが打ち上げ直前に録音したものであるが、「あたかもポポヴィッチの声が宇宙から届いているかのように聞こえた<sup>25</sup>」という。また、ヴォストーク6号のテレシコフは、おそらく「宇宙酔い」の症状が出て、宇宙飛行中のほとんどの時間、体調不良でパニックに近い状態であった。しかしテレシコフの苦しんでいる様子は絶対に中継されてはならないとして、調子のいいときだけを見計らって、注意深く中継のタイミングが決定されていた<sup>26</sup>。

親しみやすい笑顔をふりまく宇宙飛行士たちのメディア・プレゼンスは、彼らの任務において起こりえた、あるいは実際に起こったトラブルを覆い隠すのみでなく、国家機密の存在をも後景化するものであった。ソ連では宇宙開発にかかわる設備・技術者等は国家機密であり、ロケット開発の最高責任者であったコロリョフの存在すら、本人の存命中はまったく知られていなかった<sup>27</sup>。彼らは身近にもいそうな優秀な若者として、未来の世界を垣間見た存在であって、命を落とす危険性と引き換えに任務を全うした人々とはみなされていなかった。宇宙空間に行くということのもたらしうる惨劇の可能性と、彼らが国家機密に通じる軍人であるということを人々に忘れさせる、宇宙飛行士たちの親しみやすいテレビイメージは、誰でも簡単に宇宙へ行ける未来を予期させるものであった。宇宙飛行士は地球への帰還後には常にパレードを行っていたが、このときに沿道の人々が掲げるプラカードに「みんな宇宙へ Все в космос」



図7 「みんな宇宙へ」。映画「ソヴィエト・コスモヴィジョン」より。

というスローガンがしばしば書かれていたことにも、このことがあらわれている。ガガーリンによって宇宙飛行という「人類の夢」が達成されたのち、ソ連ではそれを、限られた軍人のみによって達成される偉業としてではなく、すべての人に開かれた、夢のような未来の始まりとして演出した。宇宙船からの生中継「ソヴィエト・コスモヴィジョン」は、そのためにも、安全でいかにも楽しいものでなければならなかった。

## 結び — 「人類の夢」からエコロジーへ

1962年、アメリカが近い将来に月面着陸を実現すると宣言したことで一躍有名になった、ケネディ大統領によるライス大学での演説は、次の言葉で締めくくられている。「宇宙はそこにある。そこに月があり、惑星がある。そして、知識と平和への新しい希望がある。だから私たちはそれに登るのだ<sup>28</sup>」。ただしマーキュリー計画は、有人宇宙飛行を「夢」や「希望」として語るには、あまりにも過剰なリアリティをテレビ視聴者たちに与えるものであった。マー

キュリー計画の有人宇宙飛行第1号のアラン・シェパードの弾道飛行は成功裏に終わったものの、第2号であるガス・グリソムは着水後にハッチが開いて海水が進入し、宇宙船カプセルは水没、グリソムも溺れかけるという事態に陥った。また第3号のジョン・グレンもトラブルによって地球周回飛行を予定の半分以下である3周に変更することとなり、第4号のスコット・カーペンターに至っては、大気圏への突入角度がずれたために一時は生存が絶望視されるなど、事故続きのミッションだったのである。

一方、ソ連は有人宇宙飛行を完璧なエンターテインメントとして見せるために、ミッションの危険性を思わせるような部分を一切排除していた。誰でも宇宙へ旅行できるような将来が近いのではないかと感じさせる、ソヴィエト・コスモヴィジョンのもたらした熱狂は、同時進行で広がっていた核戦争勃発への不安と切り離せないものだ。ソヴィエト・コスモヴィジョンは、核戦争の可能性を隠蔽する、「夢のような明日」の未来展示に他ならなかったのではないだろうか。

その意味で宇宙船からのテレビ中継は、有人宇宙飛行の副産物というよりも、有人宇宙飛行の目的だった。そもそも有人宇宙飛行計画は、アメリカのマーキュリー計画に対抗して急遽進められたものであったことにも留意したい。コロリョフは、ヴォストーク3・4号アヴェック飛行のあと、宇宙テレビ開発チームを褒め称えて、「テレビの一場面のためだけに、私たちは宇宙飛行士を打ち上げたと考えてもいいだろう<sup>29</sup>」と述べたが、これは単なる冗談ではなかっただろう。

フルシチョフが1964年10月に失脚し、コロリョフが病に倒れ1966年1月に亡くなると、ソ連の宇宙開発はかつての活気を失っていった。一方アメリカのほうは、アポロ計画において「崇高としての宇宙」、そして「守るべき地球」というエコロジカルなイメージを強調し始める。アポロ8号（1968年12月21日打ち上げ）はクリスマスイヴに行った宇宙船からの生中継で、旧約聖書の創世記冒頭の節を朗読するというパフォーマンスを行った。宇宙から地球を見るとということと、キリスト教の神による天地創造とを結びつけたこのテレビ中継は、当時のアメリカで史上最高の視聴率をたたき出した。また、アポロ17号（1972年12月7日打ち上げ）のクルーが撮影した、全体が光る地球を初めて球形で捉えた写真も、大きなインパクトを与えた。宇宙空間のただなかで唯一光る地球のはかなさは、あたかも青いビー玉のようであるとして「ザ・ブルー・マーブル」と呼ばれ、多くの環境主義のシンボルマークになった。そして現在の有人宇宙飛行も、基本的にはエコロジーを軸とするパブリック・イメージを利用している。

注

1. なお、万博開催中に欧州では第二次大戦が勃発しているが、フューチャラマを設計したインダストリアル・デザイナーのノーマン・ベル・ゲッデスは、ニューヨーク万博と同時期に、欧州での戦争のデータや地図、解釈をまとめた小冊子形式のシリーズを出版していたが、このシリーズのタイトルは皮肉にも、『バトルラマ Batlrama』（1939年～1940年）であった。緻密な立体地図の製作に優れた能力を発揮していたゲッデスは、アメリカが第二次大戦へ参戦したのちは、アメリカ海軍が作戦を検討するための戦場立体模型製作を任されることとなる人物でもある。Christina Cogdell, “Theater of War” in Donald Albrecht ed., *Norman Bel Geddes Designs America* (New York: Abrams, 2012)
2. 詳しくは、以下の文献を参照。Jukka Gronow, *Caviar with Champagne: Common Luxury and the Ideals of the Good Life in Stalin's Russia* (Oxford: Berg, 2003); Sheila Fitzpatrick, *Everyday Stalinism: Ordinary Life in Extraordinary times : Soviet Russia in the 1930s* (New York: Oxford University Press, 1999)
3. アレクサンドル・ロトチェンコがデザインを担当した。
4. ソ連 1930 年代のパラシューター女性というモチーフについては、沼野充義氏に貴重なご助言をいただいた。
5. 鈴木一人『宇宙開発と国際政治』岩波書店、2011年、33頁。
6. 当時のアメリカ政府は 1961 年 4 月に起こったピッグス湾事件の汚名を返上するべく、リスクをとってでもクリーンな国家像を宣伝する必要性に駆られていたし、またテレビ局としても視聴率が見込まれる内容であったため、このような放映形態が実現することとなった。Michael Allen, *Live from the Moon: Film, Television, and the Space Race* (London & New York; I. B. Tauris, 2009), pp. 75-98.
7. アメリカで宇宙船内にテレビカメラが持ちこまれたのはマーキュリー計画最後の有人宇宙飛行となったマーキュリー・アトラス 9 号（1962 年 10 月）が初めてで、これもミッション・コントロールのみに映像を送る実験的なものであった。したがって、マーキュリー計画全体を通してテレビ中継された映像は、外から撮影された打ち上げと着水の瞬間のみである。
8. ルナ 3 号のテレビシステムについては、以下の論考を参照。Игорь Лисочкин. Вот будет смеху, если эта штука сработает... // История космического телевидения в воспоминаниях ветеранов, СПб., Издание НИИ Телевидения, 2009. С.21-27
9. Lars Lundgren, “Live From Moscow: The Celebration of Yuri Gagarin and Transnational Television in Europe,” *Journal of European Television History and Culture* Vol.1, Feb 2012.
10. GARF P6903, opis 26 No.243, 1961.
11. Всесоюзный Научно-Исследовательский Институт Телевидения。ただし、1957 年までは「第 380 科学研究所 НИИ-380」が正式名称である。
12. Пётр Брацлавец. С. П. Королёв и космическое телевидение // История космического телевидения в воспоминаниях ветеранов, С.8-14.
13. «спутник, запущенный в космос без радио-телевизионной аппаратуры, похож на камень, брошенный из средневековой пращи» (История космического телевидения в воспоминаниях ветеранов, С.3)
14. ソ連における宇宙テレビ開発の歴史について、主に以下を参照した。Мария Мамырина. Воспоминания о начале космического телевидения // История космического телевидения в воспоминаниях ветеранов, С.71-81.
15. 衛星放送が可能になったのち、ソ連のテレビ番組を国際的に放映する目的で、1966 年からは録画放送に重点を置くための組織改革が行われたが、国内向けの番組は 1960 年代末までライヴ放送がほとん

どであった。Kristin Ruth-Ey, p. 233

16. «Импровизационность. Иначе говоря, ощущение, что происходящее на вашем экране совершается само по себе и в эту секунду, что телеобъектив, как хроникер, лишь фиксирует живой процесс, живое и свободно развивающееся действие. “Подглядывание” за жизнью. Жизнь, застигнутая врасплох. Быть может, это самое сильное, что может дать телевидение. Вы присутствуете при рождении слова и мысли, или футбольной комбинации, неожиданно завершившейся голом, или слезы, сбежавшей по лицу актера, глаза которого смотрят в ваши глаза...» *ВЛ. Cannak. Телевидение и мы // В. Шумова, Вл. Cannak. Семь лет в театре. М., Искусство, 1968. С. 210.* (邦訳は、以下の文献から引用した。ウラジーミル・エス・サツパク (久東弥太訳) 『テレビとの対話』、岩崎放送出版、1972年、164-165頁。

17. Dziga Vertov, “The Same Thing from Different Angels” in Dziga Vertov, *Kino-Eye: The Writings of Dziga Vertov* (California: University of California Press, 1984), p. 57.

18. «что на телевидении надо не читать, а говорить; что общение со зрителем, обращение к зрителю носит здесь характер камерный, интимным; что телевизионная передача рождает у зрителя чувство сопричастности, так называемый «эффект присутствия»; что поведение перед объектом передающих камер должно быть свободным, импровизационным.» *ВЛ. Cannak. Телевидение и мы. С. 213.* (サツパク、前掲書、173頁。)

19. 宇宙飛行士のイメージ形成について、主に以下の論考を参照した。Slava Gerovich, “The Human Inside a Propaganda Machine: The Public Image and Professional Identity of Soviet Cosmonauts,” James T. Andrews and Asif Siddiqi eds., *Into the Cosmos: Space Exploration and Soviet Culture* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2011), pp.77-106; Andrew Jenks, “The Sincere Deceiver: Yuri Gagarin and the Search for a Higher Truth,” *Into the Cosmos: Space Exploration and Soviet Culture* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2011), pp.108-132.

20. Andrew L. Jenks, *Cosmonaut Who Couldn't Stop Smiling: The Life and Legend of Yuri Gagarin* (DeKalb, NIU Press, 2012), p. 165.

21. Jenks, p. 161.

22. Slava Gerovich, “New Soviet Man” Inside Machine: Human Engineering, Spacecraft Design, and the Construction of Communism,” *Osiris* 22 (2007), p.140.

23. «И кажется, я вижу: добреют миллионы глаз – это люди увидели на своих домашних экранах Юрия Гагарина. Вот он. Здоров. Молод. Легок. Позавчера ненадолго слетал в космос и вернулся обратно. Человек, у которого все складывается как нельзя лучше. Вот он. Простой и понятный. Благополучно вывезший из космоса свое хорошее настроение и свою застенчивую улыбку. Вот так, улыбаясь, доказавший – на много веков вперед – свое право называться человеком.» *ВЛ. Cannak. Телевидение и мы. С. 167.* (サツパク、前掲書、77頁。)

24. С чужих планет вернемся мы, я знаю,

Земной увидим снова мы рассвет.

Земля, Земля, планета голубая,

Ты лучше всех, прекрасней всех планет! (Ibid.)

25. «Пел голос, который только что звучал из космоса» (В. Шарагин, Советское Космовидение. в: В космосе Николаев и Попович., С.79)

26. Rex Hall and David J. Shayler, *The Rocket Men: Vostok & Voskhod, the First Soviet Manned Spaceflights*

(Chichester: Springer-Praxis, 2001)

27. 秘密主義に対する欧米メディアからの非難をかわすために、宇宙飛行をした側に注意を引くという戦略は、スプートニクに登場した宇宙犬たちの報道に際しても行われており、それがそのまま宇宙飛行士たちのメディア戦略にも引き継がれた。Amy Nelson, “Cold War Celebrity and the Courageous Canine Scout,” James T. Andrews and Asif Siddiqi eds., *Into the Cosmos: Space Exploration and Soviet Culture* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2011), pp. 133-155.

28. “Well, space is there, and we’re going to climb it, and the moon and the planets are there, and new hopes for knowledge and peace are there.”

29. «Можно подумать, что мы пускаем космонавтов только для того, чтобы можно было организовать телевизионные сеансы.» (История космического телевидения в воспоминаниях ветеранов, С.14)

30. 宇宙から撮影された地球の写真が環境主義運動に利用できると考えたのは、在野のエコロジストたちであり、当初は彼らがNASAに写真使用許可を願い出ても、なかなか許可が下りなかった。ただしエコロジーの考え方が普及し、また宇宙開発に利用できる財源が減少していくにつれ、NASAも環境主義を取り入れた活動を行うようになっていった。

31. Allen, *Live from the Moon*, p.127. さらに、アポロ8号の乗員たちは人類として初めて「アースライズ(地球の出)」を目撃したが、のちに公開されたアースライズのカラー写真は、「守るべき地球」というエコロジカルなイメージを作り出すのにうってつけであった。アースライズについては、以下の文献を参照。Robert Poole, *Earthrise: How Man First Saw the Earth* (New Haven and London: Yale University Press, 2008).

#### 参考文献

鈴木一人『宇宙開発と国際政治』岩波書店、2011年。

富田信之『ロシア宇宙開発史 気球からヴォストークまで』、東京大学出版会、2012年。

沼野充義『ユートピア文学論——徹夜の塊』作品社、2003年。

James T. Andrews and Asif A. Siddiqi eds. *Into the Cosmos: Space Exploration and Soviet Culture* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2011)

Slava Gerovich, *The Red Rockets’ Glare: Spaceflight and the Soviet Imagination, 1857-1957* (Chicago: Univ. Chicago Press, 2011)

Andrew L. Jenks. *The Cosmonaut Who Couldn’t Stop Smiling: The Life and Legend of Yuri Gagarin*. (DeKalb: Northern Illinois UP, 2012)

Lars Lundgren, “Live from Moscow: The celebration of Yuri Gagarin and Transnational Television in Europe,” VIEW. *Journal of European Television History and Culture*, Vol. 1, no 2, pp. 45-55, 2012.

Elizabeth Papazian, *Manufacturing Truth: The Documentary. Moment in Early Soviet Culture* (DeKalb: Northern Illinois UP, 2009)

Kristin Roth-Ey, *Moscow Prime Time: How the Soviet Union Built the Media Empire That Lost the Cultural Cold War* (Ithaca and London: Cornell University Press, 2011)

Asif A. Siddiqi, *Sputnik and the Soviet Space Challenge* (Gainesville: University Press of Florida, 2003)

Золотаревский, Леонид. Калейдоскоп. Спб., АМФОЛА, 2010.

Сапак, Владимир. Телевидение и мы // В. Шумова, Вл. Сапак. Семь лет в театре. М., Искусство, 1968.

*Черток*, Б. Е. Ракеты и люди. М, РТСофт, 2007.

История космического телевидения в воспоминаниях ветеранов. СПб., Издание НИИ Телевидения, 2009.

Шаболовка 53: Страницы истории телевидения. М., Искусство, 1988.

# Live from the Future: Television Propaganda for Soviet Vostok Program

KAMEDA Masumi

---

How was the future imagined? The twentieth century gave us many imaginative configurations of what the future would someday look like. These configurations often depict a dreamy, hyper-developed world where automobiles fly, objects float, and people eat meals from a tube. One of the most important media for these futuristic imaginings was space travel, which was first realized in 1961 with Yuri Gagarin's orbital flight. In this paper, I examine the human spaceflight missions as an example of state propaganda, focusing on the television broadcasts of the Soviet Union's first human spaceflight missions, the Vostok program of 1961-63.

Although U.S. television transmitted live images of their counterpart program Mercury Missions, it consisted only of shots of the launching and splashdown, while live images of astronauts during their missions were absent until the Apollo 7 in 1968. By comparison, the Soviet Union had begun actively propagating live images of cosmonauts in space as early as 1962, and these images were delivered to viewers across the world. This so-called Soviet "Cosmovision" propaganda campaign successfully demonstrated that the Space Race constituted a new form of state-sponsored entertainment.

First, the early television professionals in the Soviet Union were so ecstatic about live broadcasting. They thought that live broadcast can reveal the life as it is, thus makes it possible to display figures on television screen being sincere and honest. Second, this feature of television idols during the sixties precisely matched with the emerging demand to create the new type of personality cult in Khrushchev Era. In a sense, Khrushchev himself behaved tele-genetic and can be regarded as a new type of political leader. In international context, this helped to overturn the prejudice against Soviets who were supposed to be a person on whom it's difficult to have an idea what is in their mind. Thus, I would like to conclude that the Soviet Cosmovision propaganda, by molding the whole picture of space technology development into the mass-entertainment program on live television, enhanced the effort of the new cult of Homo Sovieticus.